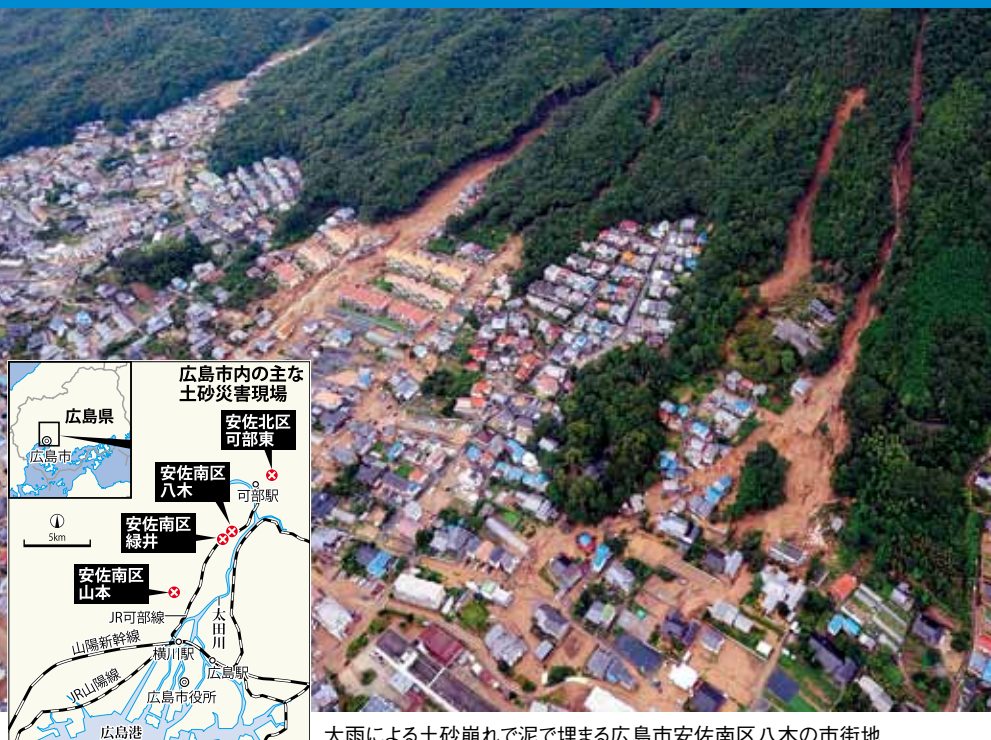




大雨による土砂崩れで泥で埋まる広島市安佐南区八木の市街地



14年8月豪雨災害に2670万円贈呈

2014年7月30日から8月26日にかけて、台風12号、11号の影響で、日本各地で集中豪雨が発生しました。この豪雨は、京都府福知山市に大規模な洪水被害をもたらし、兵庫県や広島市に大規模な土砂災害をもたらしました。

広島市北部の安佐南、安佐北両区では8月20日未明、前日から降り続いた豪雨により、大規模な土石流や土砂崩れが多数発生しました。大量の土砂が住宅街をのみ込み、死者74人、全半壊396棟の被害を出す大惨事となりました。

気象台によると、安佐北区三入(みい

り)地区では、20日午前4時半までの3時間雨量が観測史上最大の217.5ミリに達し、平年の8月1か月雨量(143ミリ)を上回りました。直径1メートル近くの岩石を巻き込んだ高さ約3メートルの土石流は、時速40キロほどのスピードで住宅地に流れ込んだと見られています。

住宅被害は、全壊179戸、半壊217戸、床上・床下浸水計4164戸。最大16万人以上を対象に避難勧告・指示が出され、住民2000人以上が避難所生活を余儀なくされました。

毎日新聞社と毎日新聞社会事業団は、

いち早く災害救援募金を呼びかけ、11月までに東京・大阪・西部3事業団に集まった2670万円(東京事業団分は830万円)のうち、2270万円を広島市に、日本赤十字社を通じて京都府、兵庫県と徳島県に400万円を贈呈しました。



土砂や大木が流れ込んだ民家の周辺で行方不明者の捜索をする警察、消防隊員ら＝同市安佐南区で

東日本大震災4年 避難生活23万人 関連死3000人越え

死者、行方不明者あわせて2万1000人を超す犠牲者を出した東日本大震災は、発生から4年がたちました。津波で家を失ったり、原発事故で郷土を離れたりした約23万人が、今も仮設住宅などで避難生活を送っています。

また、地震後に受けたさまざまなストレスや病気の悪化、過労などによる震災関連

死も3000人を越えました。被災地はなお多くの課題に直面しています。

皆様から当事業団に寄せられた震災救援金2000万円を、2014年11月に日本赤十字社に寄託しました。これまで、東京、大阪、西部各事業団から日赤などに寄託した総額は、11億590万256円です。皆様のご協力に改めて感謝申し上げます。

仮設育ち 4歳

毎朝保育園に行くために、宮城県南三陸町の須津川高校仮設住宅から飛び出す後藤美咲ちゃん4歳。生後1ヶ月から仮設住宅で暮らす。「わたしの家はここよ。家がつながっていて良いでしょ」と友だちに元気に教える姿を見て、父・一美さんは自宅の再建を心に誓う。



毎日希望奨学生 14年度は214人



東日本大震災で保護者を亡くした生徒や学生を支援する「毎日希望奨学金」は、2014年度も214人に給付されました。学校別では高校生118人、短大・大学生68人、専修学校生28人です。

この奨学金は、読者の皆様や団体からの寄付をもとに運営され、これまでに延べ798人の生徒や学生に月額2万円を給付してまいりました。引き続き募金にご協力をお願いします。

ミュージシャンからの支援も続く

この奨学金の趣旨に賛同していただいているミュージシャンからの支援活動も続

いています。

全国から一流の演奏家が集う「がんばろう! 日本スーパーオーケストラ」が15年3月2日サントリーホールで、「毎日希望奨学金チャリティーコンサート」を開催しました。

震災直後に始まった同公演は、15年で5回目。指揮者の小林研一郎さん、ピアニストの反田恭平さんを迎えたこの日の公演。最後は、オーケストラの演奏に合わせ約2000人の観客が童謡「ふるさと」を合唱しました。

同じく4日、「ジャズ・ボーカリストの阿川泰子さんがBunka

muraオーチャードホールで、「未来へ〜Le Cinema〜毎日希望奨学金チャリティーコンサート」を開きました。ジャズ・トランペット奏者の日野皓正さん、テノール歌手のジョン・健・ヌッツォさんもゲスト出演して震災遺児への支援を呼びかけました。

寄付総額は1億1191万6660円に

日本陶芸倶楽部 チャリティー作品展

アマチュア陶芸家が集まる日本陶芸倶楽部(児玉裕司理事長、東京都渋谷区)は、毎年会員が作った陶器を日本橋三越本店で展示即売して、純益は当事業団などに寄付していただいています。

14年5月に第47回日本陶芸倶楽部会員チャリティー作品発表展(日本陶芸倶楽部、毎日新聞東京社会事業団など主催、毎日新聞社後援)が、日本橋三越本店(中央区)本館6階の美術特選画廊で開催されました(写真)。

今回は会員246人が多彩な作品420点を出品。また、没後25年を記念して、同倶楽部初代理事長で哲学者の故谷川徹三氏の作品も特別出品されました。

収益金の一部170万3750円は、当事業団の社会福祉事業に寄託され、これとは別に50万円が毎日希望奨学金に寄託されました。

同倶楽部は1986年から毎年、社会福祉への寄託を続けており、今回で総額1億1191万6660円になりました。毎日希望奨学金への寄託は3年連続です。



コンサート終演後、ロビーで募金をする反田恭平さん(中央)



ご寄付の方法

◇毎日希望奨学金

- 郵便振替 毎日新聞東京社会事業団(00120・0-76498)。「奨学金」と明記してください。
- 現金書留 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1、毎日新聞東京社会事業団「奨学金」係。
- 銀行振り込み 三菱東京UFJ銀行東京営業部(普通0422292)。

口座名は「毎日新聞東京社会事業団希望奨学金」。

※振込手数料はご負担願います。毎日新聞の地域面で紹介しますので、匿名をご希望の方は「匿名希望」と明記してください。銀行振り込みの方で領収書や紙面掲載をご希望の方は、その旨を明記し住所、氏名、電話番号を書き、振込用紙の写しを添えて郵送かファクス(03・3213・6744)で当事業団へお送りください。



小児がん征圧キャンペーン

19次は1200万円を29団体に

15 歳以下で発病する

小児がんは毎年約2500人が発病しているとされ、現在も約1万6000人が病と闘っています。

小さな体と精神力で、大人でもつらい闘病生活を耐えなければなりません。本人の教育や家族の経済的負担など、さまざま

な問題を少しでも解決したいという思いからキャンペーンは続けられています。

東京・大阪・西部事業団に寄せられた2014年度の「第19次小児がん征圧募金」1200万円は、小児がんの子どもへの支援や研究に取り組む全国29団体に贈呈されました。1996年以来これまでに贈呈した総額は2億9110万円になりました。

贈呈先は次の通りです。(順不同)

がんの子どもを守る会▽そらぶちキッズキャンプ▽白血病研究基金を育てる会▽スマイルオブキッズ▽ファミリーハウス▽メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン▽難病の子ども支援全国ネットワーク▽パンダハウスを育てる会▽小児脳腫瘍の会▽アジア・チャイルドケア・リーグ▽チャイルド・ケモ・ハウス▽日本クリニクラウン協会▽近畿小児血液・がん研究会▽京都大学医学部附属病院小児科ボランティアグループ「にこにこトマト」▽京都ファミリーハウス

▽あいち骨髄バンクを支援する会▽こスマ九州▽久留米大学病院親の会「木曜会」▽こども医療支援わらびの会▽九州がんセンター小児科親の会「大きな木」▽福岡大学病院小児科親の会「みらい」▽福岡ファミリーハウス▽ファミリーハウス由布BABY MINE▽Ti-daわらばーむ▽骨髄バンクボランティア福岡▽たんぽぽハウス(熊本)▽がんの子どもを守る会九州北支部▽大分大学医学部附属病院小児科親の会「ブルースター」▽宮崎大学医学部小児がんキャンプ実行委員会

大自然で友情を深める

がんを告知された子供たちや元患者が、日常の悩みを語り合い、自然と触れ合いながらハイキングや酪農体験を楽しむ「スマートムンストンキャンプ」(がんの子どもを守る会主催)が14年7月、清里高原にある「キープ自然学校」で開かれました。

17回目となる今回のキャンプの参加者は全国から集まった6～30歳の元患者23人とボランティアスタッフ20人。小児がんという同じ境遇を乗り越えた子どもたちは、牧場を見学したり(写真)、グループに分かれてピザ作りや工作を楽しみ、大自然の中で友情を深めていました。



富士登山で深まる絆

小児がん患者やその兄弟姉妹が交流する「富士山再生キャンペーン 富士山にアタック」(毎日新聞社、がんの子どもを守る会主催)が14年7月に山梨県内で開催されました。今回が14回目で、子供ら13人などが参加して富士登山に挑戦。登山客らとあいさつを交わしながら歩き(写真)、絆を深めました。

「小児がんの回復率は高くなったが、家族の抱えるストレスは大きい。同じ境遇の子供が交流できるのは良い機会」と語る参加者もいました。



森山良子さん、竹下景子さんらも息の長い支援

キャンペーンに賛同したミュージシャンたちの支援も続いています。

世界的なバイオリニスト川島成道さんがピアニストの佐藤勝重さんと共演した、14年5月の「グランドファミリーコンサート2014」。皇后さまも鑑賞された、7月の「生きる2014～小児がんなど病気と闘う子どもたちとともに～森山良子 with FRIENDS」。4人のオペラ歌手、天羽明恵さん、谷口睦美さん、樋口達哉さん、宮本益光さんが東京フィルハーモニー交響楽団と共演した、11月の「アフラック クラシックチャリティーコンサート 生きる」。ピアニスト清水和音さんらが神奈川フィル

ハーモニー管弦楽団と協演した、15年1月の「生きる～2015 New Year.若い命を支えるコンサート」など。

いずれも小児がんの子供たちや家族らが招かれ、出演者が募金を呼びかけたほか、収益の一部を寄付していただくなどのご支援をいただきました。

また、女優の竹下景子さんもチャリティー公演「ごえんなこんさあと」(NPO「朴(ほお)の会」主催)の収益金を、小児がん征圧募金に寄託するなど支援を続けてくださっています。



①招待した子どもたちと観客の拍手に応える川島成道さん(右)
②花束を手に子どもたちと記念写真に納まる森山良子さん(手前左端)ら出演者



海外難民 救援キャンペーン

14年度は980万円を贈呈

2014年度は、大地震から4年を経過した「西半球の最貧国」ハイチに取材班を派遣しました。10年のハイチ地震で親を亡くしたり、親の生活苦から人身売買されて奴隷同然の扱いを受ける子どもたちを取材し、「見えない鎖」のタイトルで7月に紙面キャンペーンを展開しました。

皆さまから寄せられた14年度海外難民救援金980万円は、国連救援機関や難民支援活動をしているNGO（非政府組織）など22団体に贈呈しました。

毎日新聞社と毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団が海外飢餓・難民キャンペーンを始めた1979年以来、これまでに贈呈した救援金は15億9423万8344円になりました。

見えない鎖

ハイチ・ドミニカ報告



【僕は奴隷】

首都ポルトープランス。スラム街ソリノ地区でラルフ・ジャン・バプティスト君（13）はレスタベック（子ども奴隷）として暮らしています。

10年の大地震で両親を失い、親戚に預けられましたが、朝から晩まで家事労働の毎日。電気コードや木の棒で繰り返したたかれました。1年後、叔母に引き取られましたが、期待していた学校へは行か

暗く蒸し暑い部屋の窓から外で遊ぶ子どもたちを眺めるラルフ君。他の子はおなかいっぱい食べられて遊べて学校にも行ける。でも僕は……



ハイチでは、親や親戚によってわずか数千円から数万円で、子どもたちが売られるケースが後を絶ちません。大半は学校にも通わせてもらえず、路上での物乞いや靴磨き、家事労働を強制されています。彼らの姿に迫りました。

2014年度 海外難民救援金贈呈団体（順不同）

日本ユニセフ協会 すべての子どもたちが健康に、平和な世界で暮らせるようにと政治危機や紛争などで苦難を強いられている人々、とりわけ女性と子供に対して医療、食糧などの支援や教育の普及支援を実施している。

国連UNHCR協会 世界では3千万人が難民や国内避難民になり、困難な生活を強いられている。こうした難民を保護し、食糧支援、自立支援や子供の教育支援をしている。

国連世界食糧計画WFP協会 世界ではおよそ8億4200万人（9人に1人）が飢餓に苦しんでいる。飢餓をなくするため、毎年平均 80カ国以上で9000万人以上に食糧支援を続け、毎年2,000万人以上の子どもたちに学校給食を提供している。

AMDA 世界各地の自然災害発生地で緊急医療活動をしている。ネパール子ども病院への医師、看護師の派遣、医薬品、医療機器の支援をしている。

シェア（国際保健協力市民の会） タイ東北部のケマラートでエイズの予防教育やキャンペーンを展開。差別と偏見のない村づくり活動をしている。

JEN スーダンやアフガニスタンなど紛争や自然災害で厳しい状況にある地域で給水設備や衛生施設、学校の建設に取り組んでいる。

シャンティ国際ボランティア会 カンボジアやタイで子どもたちに人材育成活動や学校建設活動に取り組んでいる。

全国社会福祉協議会 アジアの民間社会福祉従事者を研修生として受け入れ、日本の社会福祉制度の学習や、社会福祉施設での研修等による人材育成を通じて、アジアの社会福祉を支援している。

ロシナンテス スーダンで、医療活動、学校・教育事業、水・衛生事業、交流事業、スポーツ事業に取り組んでいる。

AAR（難民を助ける会） カンボジアやアンゴラ、スーダンなどで未だに埋まっている地雷の除去や地雷回避教育、地域保健医療に取り組んでいる。

JVC（日本国際ボランティアセンター） パレスチナやスーダンなどで医療、食糧支援活動を実施。ラオスや南アフリカなどでは自然農業による地域開発を支援している。

バーンロムサイ タイのチェンマイ近郊で、エイズで親を亡くした子や母子感染している子どもたちのための生活施設を運営している。

ピースウィンズ・ジャパン アフガニスタン北部の干ばつ地域で飲料水や農業用水の確保、水資源の管理・活用のための調査活動をしている。

ベシャワール会 パキスタンとアフガニスタンに診療所を開設し、アフガニスタン難民に医療支援を実施。緑化事業として灌漑水路の建設や井戸の掘削に取り組んでいる。

マハム二母子寮関西連絡所 独立後間もないバングラデシュで日本人僧侶により生活に苦しむ未亡人と子どもたちの生活・就学支援の母子寮が作られた。現在も約100人の子供が生活し、学校に通っている。

緑のサヘル アフリカ・チャドとブルキナファソで緑が急速に失われている地域の砂漠化防止のための植林事業を実施し、住民が定住できる環境づくりに取り組んでいる。

ワールド・ビジョン・ジャパン アジアやアフリカで性的搾取を受けたり、危険な場所で働き、路上生活をする子どもたち、障害のために差別される子どもたち、難民キャンプで暮らす子どもたちへの支援活動をしている。

シエラレオネフレンズ アフリカ・シエラレオネにおいて、将来を担う子どもたちへの学校教育や給食を支援している。

ネパール・ヨードを支える会 ネパール・ヒマラヤ山麓の農村地帯の風土病である「ヨード欠乏症」対策に取り組む。

難民支援協会 様々な理由から自分の生命を守るために自国から避難して日本にのがれて来た人々のための支援活動をしている。

ハイチ友の会 95年設立。コレラ・結核対策、教育環境整備、農村開発事業など大地震以前から幅広くハイチへの支援を続ける。

CODE海外災害援助市民センター 阪神・淡路大震災の経験と知見を活かして02年に発足。世界各地の自然災害に対して救援支援活動に取り組む。

せてもらえず、朝から晩まで家事をする日々は変わりません。彼だけコンクリートの床で寝かされています。「悔しさと悲しさが込み上げてくる。こんな生活から逃げ出したいけど、逃げる場所もない」



叔母の家で暮らすジュデリーヌ・ドゥシルさん（12）。毎朝5時に起き、水くみ、朝食作り、洗濯、掃除、買い出しと寝るまで働きつめます。



ポルトープランス中心部。車が近付くと、10人近くの少年たちが走って車を囲み、手にした雑巾で勝手に車を拭き始めます。親に捨てられ、行き場を失ったストリートチルドレンです。



毎日新聞東京社会事業団は、手足の不自由な子どもたちを対象に、毎年夏と冬にキャンプを開催しています。

2014年8月7日から12日までの5泊6日の日程で、第58回手足の不自由な子どものキャンプ（当事業団、日本肢体不自由児協会、東京YMCA主催）が、山梨県山中湖村の東京YMCA山中湖センターで開催されました。また15年1月には、10日から12日まで「第26回 雪と遊ぼう!親と子の療育キャンプ」（当事業団、日本肢体不自由児協会など主催、新潟県南魚沼市後援）が、南魚沼市の市営八海山麓スキー場で開催されました。二つのキャンプを支えてくださった多くの皆様に深く感謝いたします。

ビッグカヌーに歓声

豊かな自然環境の中の集団生活を通じて、自主性や協調性を養う――。

「手足の不自由な子どものキャンプ」には14年夏も、障害を持つ小学3年生から高校3年生までのキャンパー 41人と、学生や社会人のボランティアスタッフ、医師、看護師ら総勢約120人が参加しました。

夏空の下、笠雲がかかった富士山の歓迎に子どもたちは大喜び。野外調理や、スポーツ大会、プール遊びにも挑戦しました。

一番人気はビッグカヌー。ボランティアに支えられ、湖に漕ぎ出すと子どもたちから一斉に歓声が上がります。雨が降り続いた後半も、風鈴づくりやシャボン玉遊びなど室内プログラムに挑戦。

夏のキャンプを存分に楽しみました。

最初は、一人静かにしているだけだった女の子が、やがて積極的に友達に話しかけます。友達に、進んで手を貸すこともできるようになりました。自主性と協調性を学び、ひとまわり大きくなった5泊6日のキャンプでした。



富士山をバックに記念撮影



ちょっと冷たいけれど
プール遊びも楽しい



人気のビッグカヌー。子ども
たちの歓声が湖面に響く



大きなボールを打ってホームラン。
野球も上手になりました

雪の中を転げ回って大喜び

雪国の自然の豊かさと雪遊びの楽しさを体験しよう――。

「雪と遊ぼう!親と子の療育キャンプ」には、首都圏在住の児童22人と保護者、ボランティア、医師など計106人が参加しました。

ゲレンデは一面の銀世界。子どもたちは「雪だ」「雪だ」と大喜びで、雪の中を転げ回ったりして楽しみました。ボランティアがそりを坂の上まで押し上げると、子どもたちは、歓声が上げながら次々にそりに乗って滑り降りました。バランスを崩して雪の中に突っ込む子もいますが、みんな笑顔です。

集団生活を通じて、子供たちに協調性や自立心を養ってもらうのはもちろんですが、保護者の皆さんには、医師ら専門家を

交えて交流しながら、療育について学んでもらうというもこのキャンプの狙いです。



みんなそろって記念撮影



重い杵を振り上げてよいしょ!



みんなで作ったがまくら



ヤッホー!

第44回 毎日社会福祉顕彰

福祉の向上に尽くした個人、団体を顕彰する2014年度の第44回毎日社会福祉顕彰(毎日新聞東京・大阪・西部社会事業団主催、厚生労働省、全国社会福祉協議会後援)は、推薦された42件の中から以下の3人に贈られました。10月8日(水)に毎日新聞東京本社で開催された贈呈式で、3氏に賞牌(しょうはい)と賞金(各100万円)が贈られました。

明石 恒浩さん(61)

(ザ・ブラフ・メディカル&デンタル・クリニック院長=横浜市)

1987年に在留外国人の医療に取り組む診療所院長として着任して以来、言葉の壁や高額な医療費に悩む在留外国人への支援を続けてきました。

不法滞在の可能性があったり、健康保険に加入しておらず医療費が払えなかつ



たりしても、出来る限り対応しました。外部の医療機関が出した診断書も患者の母語に翻訳して説明します。

診療所の存在を聞きつけ、県内外から頼ってくる外国人が後を絶ちません。依然として医療費の支払い能力がないことを理由に外国人の診療拒否をする病院が少なくないからです。

明石さんは「国際的な信頼を得るためには人道的な医療体制の整備が不可欠」と訴えています。

桐生 清次さん(80)

(社会福祉法人七穂会理事長)
(=新潟県新発田市)

36歳で中学校の特別支援学級教員となつて以来、40年余にわたり一貫して知的障害者の社会参加に尽力してきました。

教員時代には、120人以上の卒業生の就労に尽力。定年退職した94年には、胎内市にある授産施設「虹の家」の施設長に就任しました。

その後、施設を3か所増設して、多くの知的障害者に雇用の場を創出。障害者雇用への理解と啓発活動にも積極的に取り組んでいます。また、自治体が用地を提供し、企業が作業所を作り、授産施設が運営を担うという障害者雇用の新しいあり方を編み出し、成功させました。

「障害があってもなくても互いの命を尊重し、共生できる社会にしたい」と話しています。



岩田 美津子さん(62)

(NPO法人てんやく絵本ふれあい)
(文庫代表=大阪市)

生まれつき全盲の岩田さんは、わが子から「絵本を読んで」とせがまれたのをきっかけに、透明シートで本文の点訳と絵の輪郭や説明を貼り付ける「てんやく絵本」を考案。絵本文庫を自宅に開設しました。

以来、文庫を事務所に移して30年にわたり全国の母親に貸し出す活動を続けていますが、今では120人のボランティアが年間300~400冊を製作し、蔵書は約1万冊。全国約200の個人や団体に年間約6000冊を貸し出しています。

目の見えない母親が、目の見える子どもに絵本を読み聞かせて共に楽しむ。目の見えない子どもが初めて絵本を読む。本の製作と貸し出しの活動を通して、全国の視覚障害者に絵本を味わう喜びを届け



感謝の気持ち 母の日・父の日募金キャンペーン

「贈り物をする母がもういない」という読者の声で2005年から始まった「母の日・父の日あしなが募金キャンペーン」は、07年以降「母の日・父の日募金キャンペーン」として、あしなが育英会への寄付だけでなく、児童養護施設の子どもたちへの支援にも役立てられています。

14年度は5、6月に紙面キャンペーンを展開しましたが、東京・大阪・西部3事業団に187件、271万917円(うち東京は100件134万2062円)の寄付が寄せられました。寄付金の2分の1をあしなが育

英会に贈呈。2分の1を「交通遺児等を支援する会」、「カリヨン子どもセンター」、「ブリッジフォースマイル」、「日向ぼっこ」、「子どもの虐待防止センター」に贈りました。

交通遺児等を支援する会

14年8月2日(土)、恒例のバスハイクに交通遺児等の親子37名が参加しました。子供達は、午前中にキッコーマンの「もの知りしょうゆ館」(千葉県野田市)を見学し、清水公園でのバーベキューとアスレチックも楽しみました。天気も良く、バスの中でのボランティアによる面白いゲームや、素敵なお土産に、「とても楽しかった1日」と、たくさんのお礼状が、子供達から届きました。【事務局・高敏明子さん】



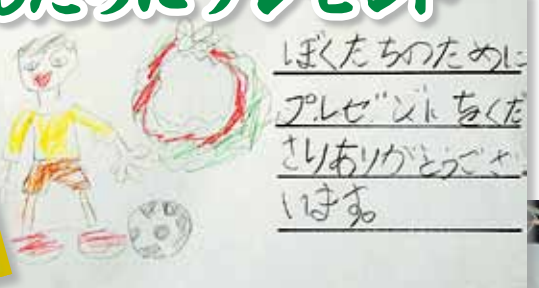
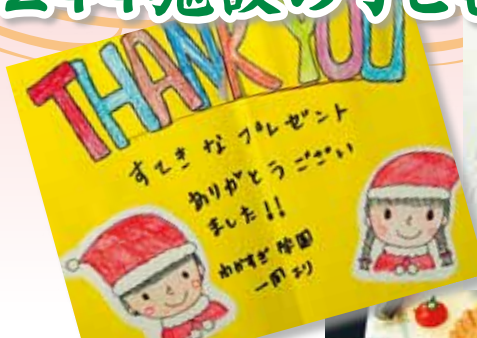
歳末助け合い 244施設の子どもたちにプレゼント

家庭の事情などでクリスマスやお正月を施設で迎える子どもたちに、少しでも楽しいひと時を過ごしてもらおうと、2014年も東日本の民間児童養護施設244カ所の子どもたちに、クリスマスプレゼントとしてスポーツ用品や玩具などを贈らせていただきました。

読者の皆様からの温かいご支援に心から感謝いたします。

子どもたちへのプレゼントには、「フィッシングパズル」や「ままごといっぱいセット」、ルーレットなどの幼児向けの木製玩具のほか、バレーボールやバドミントン、フラフープ、縄跳びなどのスポーツ用具、それにハイパーヨーヨー、「ドキドキゴリラ」などみんなで遊べる遊具を選びました。

施設の児童からは、「プレゼントありがとう」「大切に使います」などと書かれたお礼状や、おもちゃで楽しそうに遊ぶ子どもたち自身の絵、それに折り紙などで飾られたきれいなクリスマスカードが届きました。



ホームレス支援団体にも助成

路上生活者の方々が少しでも温かい年末年始を過ごせるよう、東京都台東区の山谷地区で支援活動をしている「山谷兄弟の家伝道所」、「自立支援センターふるさとの会」、同地区のホスピスケア施設「さばうのいえ」、アルコール依存症からの脱却・自立を支援している横浜市の「市民の会 寿アルク」の4カ所にも助成金を贈呈しました。



●炊き出しに2100食 自立支援センターふるさとの会

年末年始の6日間、真冬の寒さの中、隅田川周辺で路上生活を送る方々1,023名に、計2,112食の暖かい食事を届ける事ができました。(写真)

河川敷工事の影響もあってか、配食現場付近ではテントの数が減少していますが、居場所を転々とした困窮状態にいる方や遠方から炊き出しに並ばれる方がおり、結果として例年以上の配食数になりました。

炊き出しが不要になる将来を望みながらも、今後の動向に注視しながら活動していきたいと思います。また、「世の中がにぎやかな年末年始に、一人でさみしく過ごす事がないように」をスローガンに、ふるさとの会の支援を受けながら地域のアパートや支援付き住宅で生活している方々と、地域ごとの「鍋会」や「初詣」など、計36回のイベントを実施することができました。

ご支援をいただき、ありがとうございました。(古木大介事務局長)

チャリティー書展寄託 総額で5493万円に

一般財団法人毎日書道会は毎年1月の「毎日チャリティー書展」の収益金を当事業団に寄託しています。

1985年から続く同書展ですが、15年も1月5～11日に東京銀座画廊美術館で開催され、毎日書道会の役員や全国の役員

書家274人の作品が展示・販売されました(写真)。

今回も収益金340万円が当事業団に寄託されましたが、これまでの総額は5493万3000円となっています。



大学医学部、医科大学の4サークル 地域医療研究・実習への助成

大学医学部、医科大学のサークルが夏休みを利用して地域医療研究や実習を目的に実施するボランティア活動に対し、2014年度も4大学のサークルに助成しました。若い医学生たちの地域医療への取り組みを後押ししています。

▽慶應義塾大学医事振興会

8月に山梨県甲州市と東京都大島町で医師1名と看護師5名、学生45名が、知的障害者施設や高齢者施設での介護実習、健康指導などを行いました。

▽東京慈恵会医科大学疫学研究会

10月に茨城県常陸太田市で、医師10名と看護師2名、学生15名が、地域住民に保健指導と健康相談を実施しました。

▽東京女子医科大学地域保健研究会

8月に学生23名が、医師1人で島民650人の健康を守る、沖縄県座間味島の診療所で離島地域医療を学びました。

▽松本歯科大学地域医療研究会

それぞれ4～6名の医師と学生が、年間を通して長野県内の重度障害者施設などを訪問し、歯の健康診断、衛生指導、簡単な治療を行っています。

その他の主催・後援事業

当事業団は、2014年も社会福祉のさまざまな分野で活動しました。その他の主催事業・後援助成事業は次の通りです。

■主催事業

- ◇全国盲学校弁論大会
- ◇「声の点字毎日」の製作、寄贈

■後援・助成事業

【東京ヘレン・ケラー協会への助成】

- ◇点字図書館への助成
- ◇ヘレン・ケラー学院事業への助成
- ◇東京ヘレン・ケラー協会本部への助成
- ◇ヘレン・ケラー記念音楽コンクールへの助成
- ◇海外盲人交流事業への助成

【児童福祉事業】

- ◇東京都社会福祉協議会児童部会江戸っ子杯の後援と参加賞贈呈



14年度江戸っ子杯の表彰式

【障害者福祉事業】

- ◇療育ねっとわーく川崎への助成(14年度から)
- ◇肢体不自由児・者の美術展の後援と助成
- ◇わたぼうし音楽祭の後援と助成
- ◇全国盲学校野球大会の後援と助成
- ◇関東聾学校体育連盟大会への後援と賞品贈呈
- ◇日本車椅子バスケットボール選手権大会の後援と助成
- ◇日本ブラインドテニス大会の後援と助成
- ◇「心の輪を広げる障害者理解促進事業」の後援と賞品贈呈
- ◇日本点字図書館のチャリティー映画会の後援と助成
- ◇中途失聴者・難聴者のための読話学習への助成
- ◇わらじの会夏合宿の助成
- ◇全東京ろう社会人軟式野球TDリーグの後援と賞品贈呈
- ◇朗読録音奉仕者感謝行事(鉄道弘済会主催)の後援
- ◇東京都盲人福祉大会の後援

【その他の社会福祉事業】

- ◇自殺防止電話相談事業「いのちの電話」への助成

療育ねっとわーく川崎

病気や障害のある人も家族も、地域で豊かな生活を送れることをめざして、2000年に発足したNPOです。今は、こどもたちのデイサービスから、グループホームまで、多様な支援をしています。中でも、発足時から大切にしてきたのは、医療的ケアのある方への支援です。介護職も吸引や栄養注入の研修を受け、看護職と連携してケアしています。いつも、懸命に生きるこどもたちの笑顔に励まされています。【事務局・谷みどりさん】



- ◇自殺予防のための治療・相談事業「青少年健康センター・クリニック絆」への助成(14年度から)
- ◇福祉囲碁東京大会の協賛と参加賞贈呈
- ◇高齢社会に生きるボランティア講座への助成

ご寄付の方法について

社会福祉寄金、海外難民救援金、小児がん征圧募金は年間を通じて受けています。当事業団へのご寄付の方法は以下の通りです。

●郵便局でのお振り込み

郵便局に備え付けの払込取扱票(振替用紙)に金額、住所・氏名などの必要事項をご記入のうえ、お振り込みください。送料無料の払込取扱票(振替用紙)をご希望の方は当事業団にご請求ください。

【口座番号】00120-0-76498

【加入者(送り先)】毎日新聞東京社会事業団

※「寄付名」を通信欄に必ずお書きください。

※金額とお名前を毎日新聞の地域面に掲載させていただきます。匿名を希望される方は通信欄に「匿名」とお書きください。

●現金書留でも受けつけています。

●お問い合わせ先

毎日新聞東京社会事業団

〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

電話＝03-3213-2674

FAX＝03-3213-6744

E-Mail＝mai-swff@fine.ocn.ne.jp

ホームページ＝http://www.mainichi.co.jp/shakaijigyo/

書き損じのハガキ・未使用の切手を寄付してください

宛名を間違えたりして使えなくなったハガキやあまった年賀ハガキ、引き出しに眠ったままの未使用の切手を寄付してください。書き損じのハガキや未使用の切手は、郵便局で手数料を差し引いて、新しいハガキや切手に交換してもらいま

す。毎日新聞東京社会事業団では、通信用として使わせていただきますが、通信費が節約できた分を社会福祉事業に活用させていただきます。

個人情報について

当事業団へのご寄付に際して、知り得た皆様の個人情報は、当事業団からの領収証、お知らせなどの送付や問い合わせなどに使用させていただきます。それ以外には承諾なしに使用いたしません。